

## 食えぬ話

『一世纪の胃袋は養えるか』

一九九二年の冷夏で日本のコメの生産量は平成の大凶作となつて、戦後の最低ラインの八百万トンを割り込むほど落ち込み、暴騰した内地米を買うのにオイルショック以来の買物行列ができた。外国産米の緊急輸入が始まりコメの国際価格をあげ平成米騒動の様相を呈していた。「転してこの2年は猛暑による大豊作が続いて今度は米余りで以前の反動での値下がりが目だつた。天候の激変による需給バランスの崩れでしばしば価格が大きく変動する。オイルショックの時もエルニーニョが日本の台所を直撃し、豆腐の値段が一倍に高騰させてインフレを加速させた。

エルニーニョが起ると世界三天漁場の一つであるペル沖に海水温に異変が起る。寒流への湧昇流のなかで育つ豊富なプランクトンが姿を消し、アンチョビというカタクチイワシの漁獲が激減する。それを動物性の蛋白質として使っている飼料が極端に不足する。ついには大豆や大豆の搾りかすに需要が集中して値段が上がる。その結果、輸入に頼りきつている日本で値段が上がり「風が吹けば桶屋が儲かる」方式でエルニーニョが起ると豆腐の値段が2倍となってしまった。

この年は旧ソ連の不作で小麦相場が一・三倍に値上がりし、米国が主要農産物の輸出を一時ストップさせて食糧安保守に石を投じた年でもあった。八十年は日本でも大冷夏となり、世界的な異常気象となつて食料危機が叫ばれた最初の年となつた。

翌八年から八年にかけてのエルニーニョの時にはアフリカの干魃と飢餓が進み、病んだ地球上で四分の一が飢餓に苦しんで21世紀を迎えるようとしている。

21世紀を待たず最近の国際的な穀物相場と在庫に黄から赤信号のシグナルが点滅した。穀物の相場はジリジリ上昇しだし、世界的な食料危機が最初に叫ばれた八〇年以来の六年ぶりの高値となってきた。高度成長目覚ましい中国や東南アジアの国々の肉類の需要の拡大と、世界のパンかご」米国の不作によるもので、トウモロコシの在庫が大恐慌以来の干ばつといわれた年の最低水準にまで落ち込み、小麦や大豆など主要穀物の在庫が軒並み危機ラインに近づいている。もし80年並みの異常気象に見舞われたら再び世界規模の危機の到来となりうるレベルとなつている。

そこで気になるのが環境保護団体ワールドウォッチのレスター・グラウンド氏によるレポート2030年には中国の穀物が3億トン「前後不足する」と予測した。誰が中国の胃袋を養うのか』である。あら筋は以下の通りである。世界人口の2割を占めている中国が毎年およそ一千万人のペースでさらには肉食が普及して、牛肉「キログラム」に生産するには76%のエサが必となる家畜のエサの輸入が増大する。工業開発での農地の減少と公害の拡大、農業収入との格差による勤労意欲の減退。黄河中流域にオルドス高原があるが、かつてジンギスカンの時代にはここには森が広がっていたが、現在は老木が幽鬼のごとく一本立つてゐるのみで地面の

侵食が著しく進んでいる。このような土壤の侵食や内陸での砂漠の拡大、酸性化、さらに温暖化による加速により耕作地の減少・等々である。

反論も多い。根拠となる数字の過大な見積や筋書きが環境保護に偏り過ぎている。今後30年で穀物需要は倍増するがその供給は可能であり、いたずらに危機感を煽るべきでないと意見も根強い。しかしながら世界で輸出に回わせる穀物が2億トン程度、日本のコメが一千万トンということを考えれば、中国の胃袋の圧力は過小には扱えない。その中国では九三年に戦後最悪の洪水被害に見舞われ、九四年も最悪といわれる大干ばつとなり、ついには二世紀を待たずしてトウモロコシの輸出国から輸入国に転じてしまった。一方、日本は世界最大の食料輸入大国であり、米国からの輸入がむろん第一位であるが一位はすでに中国からとなり依存性が高まる一方で問題の深刻さがうかがえる。

中国の胃袋の脅威』のシナリオの大前提には、経済の高度成長がこのまま順調に続いて外貨が手元に残つて穀物の買い付けができることがある。それは飽食になれた日本の胃袋を誰が養うかと同じ次元の話である。飢餓に悩む発展途上国のはとんどが外貨不足、債務国で輸入がままならない現実を考えれば、穀物価格の高騰で当然ハイが細つて飢餓が進むことになる。宇宙に浮かぶ青い地球には、酸性雨で枯れた森や、海岸戦争で炎上した油田の黒いシミ、熱帯雨林の緑野を縦横に走る煙と茶色い線が走り病みつつの。この状況で人口爆発と温暖化が進む二十一世紀を迎える前に

「誰が誰の胃袋を養うのか」と同時に「誰と誰の胃袋を養うのか」という政治・経済の話に気象が深く複雑に絡んだ問題として問い合わせられている。